

岡山県高等学校教育研究協議会第1回会議 議事録

令和7年8月26日(火) 13:00～16:00
県庁3階大会議室

出席委員：赤木委員、浅野委員、岩本委員、加藤委員、川上委員、河原委員、國定委員
河本委員、小林委員、小松原委員、杉本委員、高瀬委員、内藤委員
中村委員、仁科委員、原田委員、藤岡委員、藤原委員、村田委員

1 教育長あいさつ

2 委員及び幹事紹介

3 研究協議会規程について

4 会長・副会長の選出

会 長 高瀬 淳 岡山大学大学院教育学研究科長
副会長 仁科 康 岡山県都市教育長協議会会長
丸尾 宜史 レプタイル(株)代表取締役

○会長あいさつ

5 研究協議について

(1) 研究協議の依頼

次の3つの項目について依頼。

- ・魅力ある高等学校づくりの方策について
- ・高等学校教育の基盤整備の方策について
- ・その他関連する重要な事項について

(2) 研究協議の進め方

6 議事

(1) 議事運営について

要項7ページの「岡山県高等学校教育研究協議会の議事運営等についての
申合せ(案)」を基に審議し、原案どおりとすることが確認された。

(2) 事務局説明

高等学校教育の現状について、次の3つの観点から説明。

- ・少子化が加速する地域における高等学校教育の在り方
- ・全日制・定時制・通信制の望ましい在り方
- ・社会に開かれた教育課程、探究・文理横断・実践的な学びの推進

(3) 研究協議

ア 魅力ある高等学校づくりの方策について

次の2つの観点を踏まえて、ご意見を伺った。

- ・ 社会情勢の変化や多様化する生徒のニーズに対応した教育内容
- ・ 地域と連携した学校づくり
 - 経営者の目線から、教育のゴールは、自立してお金を稼げるようになるということだ。主体的に自分で意見を出せるのが子どもの成長にとって一番の魅力であり、挑戦できる人間に対しての選択肢を与えてくれるのが、魅力ある高校だ。
 - 県立高校の寮を運営するに当たり、職員がついてないと土日の開寮ができないところを改善してほしい。高梁城南高校は、岡山県レベルだけではなく全国からのニーズがある。落ち着いてゆったりとした工業系の学校が、都市部にはないと聞き、そうしたニーズの獲得という意味では良い選択肢になっていると思う。
 - 学校環境の変化をうまく先取りし、デジタル技術を活用したコンパクトハイスクールへのチャレンジが必要だ。エリアというキャンパス、工業系高校であればテーマというキャンパスのように学校外にキャンパスを広げることで現実味を帯びる。
 - 高校は伝統的に少品種大量生産が得意だが、今後は多品種少量生産とし、いろんな子どもたちを受け入れて、いろんな先にいろんなフォローをしていくということが必要だ。多様な生徒を受け入れて個に応じた進路に導くためには、学科の枠組みを変えていくことが必要だ。
 - 社会情勢の変化が激しく、高校改革が進む変化の時代であることから、次の10年において、PDCAを早いサイクルで回すとか、テンポよく議論を形にして、なるべく早く学校現場や生徒に届くようにすべきだ。
 - 県庁での会議だけでなく、高校現場へ行き、授業の見学、生徒との対話や意見交換を行うなど、現場に行くことで多様な視点で議論できるのではないか。教育委員会、教育関係者だけの中で議論をしても、地域との連携や社会とのつながりといった議論にならず、例えば、専門高校の在り方については、県の産業施策とともに考えていく必要がある。県や市町村の首長部局側などステークホルダーが参画していることが必要だ。
 - それぞれの経験や思いで議論するのも大事だが、データやエビデンスに基づく議論が大事だ。例えば、通信制の生徒がどの程度学習しているか、県内生徒は、中学校卒業後県外のどこに出ており、逆に県外から岡山県に来る生徒はどこから来ているのか、また、地域との連携では、市町村が県立高校に対しどういった支援をしているのかなどデータを基に議論することで、具体的、効果的な施策をつくっていくことができる。

- 津山にある高校を訪問した際、最新の調理器具、電磁器具もないことから、立派な先生にお越しいただき調理の仕方を教えてもらうことができないというような状況があった。教育内容の充実を図るためには、教育環境の充実も必要なことと思う。
- 中学校、高校での部活、クラブ活動の在り方について、学校の先生がどこまでどのように関わっていくのかも重要な課題になってくる。
- 自分のふるさとを見直す様々なイベントなどに参加することを、各高校の魅力それぞれのよさを出していくためにも、生徒にぜひやってほしい。
- 受検という形で、生徒は希望する学校へ行けるかどうかということはあるが、県立高校同士での生徒の奪い合いはやめてほしい。生徒が毎日夢を持って学校へ通えることが一番である。
- 教職員の方々と話す中で、個性を発揮できるような職場づくりが必要と感じる。学校間での特徴争いはやめてほしい。
- 県立高校を一つの学校と考えて、企業でいえば各支店のように、各地区に学校（建物）があるという考え方で取り組んでほしい。
- 急速な社会の変化の中で、高校教育も変わってきている。中学校の現場も同様で、主体性を発揮し、自己調整しながら学びに向かうことを目指す教育を実施している。
- 小・中の義務教育段階では、同じ市町村の教育委員会の中で連携を図り、9年間の学びの連続性があるが、中学校と高校の6年間についても、市町村と県が共に生徒たちの将来を見通せるような、関係づくりができていくのかと思う。魅力ある高校づくりという意味でいうと、学校を社会に開くことや市町村教育委員会の施策なども含めた中高の連携が必要だ。
- 高校が様々な学びの工夫、新しい取組をされていることを踏まえ、中学校でも、総合的な学習の時間の中で探究、PBL等に取り組むところが増えてきた。高校において、実際に中学校での学びが更に生かされて、子どもたちが可能性を広げていけるような教育が展開されればありがたい。
- 特別な支援を要する生徒の割合は増加しており、高校を選択する際に、全日制を希望する生徒もいるが、通信制のサポート校等を選択する生徒が非常に増えてきている。中学校でも、いろんな特性を持った生徒に対し、高校への入学がゴールではなく、3年間きちんと学び、卒業できるよう進路指導等を行っているが、続かなかったという生徒も少なからずいる。県立高校での特別支援教育体制の充実を引き続き行ってほしい。
- 高校の存続は、自治体にとっても非常に大きなところであり、しっかり自治体とも連携しながら、学校づくりと地域づくりを併せて考えていけたらと思う。

- 産業系高校の生徒が地元就職を希望する割合が多い理由は、日頃の授業や学校行事で地域や地元企業と連携した取組を積極的に行っていること、そして地元にはどのような会社や仕事があり、どのような社会的貢献をしているかということを生徒が知識として持っていることであり、産業系高校の意義はこうしたところにある。
- 先行き不透明な時代にあって、産業系高校は、それぞれの分野において、基礎基本の学びとその分野の先端的な学びの両方をバランスよく学習することで、高い専門性を持ったスペシャリストとして地域社会に貢献できる人材を輩出できる。
- 魅力ある高校が個性的で特色ある学校とイコールにされていることに疑問をもっている。個性がないことが魅力かもしれず、個性的であろうとすることがかえって全日制高校を非常に苦しくしていると考ええる。
- 高校の最も重要な特色は、岡山県のどこに住んでいても公教育が受けられるということだ。地方に住む者は、高校教育を受けたくても家を離れて下宿をしなければ受けられないというのは、教育の最も大事な、高校入学を望む全ての子どもたちに全国一律に高校教育を受ける権利があるということを否定することになるのではないか。高校の再編に当たっては、岡山県のどこに住んでいても、受けたい子は高校教育、公教育が受けられるという保障をしなければいけない。
- 地域のために役立とうなどと現時点で子どもは考えていないかもしれない。地域に役立つ、求められる人材になるよう教育するという大人の視点を重視するのか、教育を受けている子どもたちの視点を重視するのかというところが悩ましい。
- 多様化するニーズに対応することは必要だが、多くのニーズに応えようとするあまり、専門的でニッチな分野になり過ぎるのはどうかと思っており、どのようなニーズがあるのかをしっかりと見極めることが重要だ。
- あまりにも魅力づくりに特化してしまうと、かえって子どもが行きづらいことがあるのではないか。高校時代は、その後の人生をほぼ決定づける大事な時期で、学習も必要だが、友達との付き合い、部活、地域貢献活動など、そのあたりをイメージした学校づくりができたらと思う。
- 社会に対して漠然としたイメージしか持っていない子もおり、そうした子に対して、地域活動を押しつけるのもどうかと思う。地域活動がどのような効果を上げているのかなど、検証が必要だ。また、全ての高校が地域活動をする必要があるのか、地域が学校との連携を望んでいるのか、ということも含め、実態の声を知りたい。
- ここの学校へ進学したら、子どもたちが生き生きし、本当にやる気で頑張っているよ、力が伸びているよ、というのも大きな特色で、見

た目の美しさだけではなく中身で勝負というのも大事なことはないかと考える。

- 地域と連携するには、何のためにするのか、その目的が明確でないといけない。ただやって、何も残らないのはもったいない。
- 夢育はとてもいい。非認知能力育成とともに、高校生にそうした力をつけてもらえるような高校を今後もつくっていくようにしたい。
- 総合的な探究の時間や選択科目を拡充して、文理横断、職業教育、ICT教育などを横断的に組み合わせていけるカリキュラムができればよい。また、PBLや夢育で、生徒が自分の興味や将来のキャリアに沿って学べるような環境を整える必要がある。また、病気や、不登校傾向の生徒の学びを保障するために、同時双方向の遠隔授業やフレックス制といった多様な学習形態の標準化や、学習面、生活面とその後の就労面をつなぐチーム支援の充実、合理的配慮や通級の仕組みも今後拡大をしていくべきだ。
- 地域連携では、単なる外部講師の導入にとどまらず、学びの社会還元と地域の活性化を同時に生み出していくことが必要。地域の産業と直結した実習や企業インターン、あるいは大学の研究との共同プロジェクトを創設し、地域で就業、起業する選択肢も提示できる体制ができればよい。
- 中学生には、高校の特色が分かりにくいようだ。各校が何を目指しているのかをより明確にしたスクール・ミッションを再定義し、情報を積極的に発信していくことも必要だ。
- 地域社会にとって高校の存在というのは非常に大きく、高校の存在というものを地域の中に位置づけて、どうそれを維持していくかというところが議論になる。そういった問題に関心を持っている生徒を増やしていく、つくっていくことは大事。
- 地域という言葉は、身の回りの空間を指すこともあれば、岡山県全体を指すこともあり、地域との連携といっても、どの連携を指しているかはしっかり見る必要がある。高校と地域の連携を考えるときは、地域をある程度身の回りの空間、生活空間として捉えないといけなため、広域でやることが果たしてどの程度可能なのか、考えないといけな。また、PBLなど進んできているが、数値を入れると答えが出てくるみたいな形の教育になりかねないと危惧している。どの程度のレベルを目指してやるかというところを考えないといけな。
- 大学も、中高と連携して、誰もが学べ、誰もが社会に出られる環境をつくっていかないといいな。
- 県内どこに生まれても少なくとも高校を卒業するまでは地元で良質な教育を受ける機会を保障できる状況を目指すべきであると考えな。県立高校の統廃合は、入学者実数を基準にほぼ自動的に進んでいくということになっているが、最適解とは思っていない。教育には多

様性が必要で、歴史、伝統、独自性の高い教育理念を持った私立高校を健全に維持していくことで、県立と私立とが一緒になって岡山県の教育最適化を進めていく必要がある。

- 例えば人口集積地域等を中心に私立の定員比率を高めて、それによって得られる差額を県立の中山間地域の小規模校の運営費に充てていくというようなバランスの取り方がある。
- 公立私立問わず、高校は地域の教育文化の拠点のため、地域の振興、活性化の面でも大きな役割があり、何とかこれを維持しないといけない。小規模校になり、スケールメリットは得られにくくなるが、例えばオンラインでの単位修得の制限緩和や学校間での単位互換などで担保できる。
- 中山間地域の小規模校では、コミュニティ・スクールの枠組みのもと、高校教育の意義や地元高校としての役割について、スクール・ミッションも含め地域の関係者と共通理解をはかり、地域が当事者として関わる仕組みづくりに取り組んできた。成果の一例として、自治体による県外生徒受け入れのための宿泊施設の設置や、生徒と地元住民との交流の場の創出につながっている。
- 都市部の大規模校でも、総合的な探究の時間を柱に、生徒が自らの興味・関心に基づき、学校内外で企業や大学等と連携して学習を進めている。こうした取組は、生徒の多様な関心に応え、学ぶ力を伸長する効果がある一方で、教員の負担も考慮したカリキュラムや放課後等の個人活動との接続、また予算の確保や配分方法の在り方などが課題となっている。県教委とも連携しながら、教育活動を支援する組織をつくっていく必要があると考えている。
- A I の時代において、人が本当にやるべきことが何なのか突き詰めて考えていく必要がある。人は、A I と違い、感情があって心がある。パッションをもって仕事に臨むとか、人にしっかり寄り添っていくといった部分は、いろんな業界で求められていくと思う。教育においても、学びを教えることだけでなく、一人ひとりに寄り添っていくことが重要で、人口減少の中で、一人ひとりの生徒の個性や特性を先生方が見い出して伸ばしていくことが非常に大事だ。その結果、自己肯定感が高まっていく。A I の時代になり求められることが変わっても、変わらず大事なことは自己肯定感をもっていることだ。また、産業界でも競争から共創に移行してきている。他者をリスペクトする姿勢も大切だ。
- 高校教育が文系理系で分けているのが問題で、文系だけ理系だけでは、これからの社会に通用しなくなる。学びの楽しさをしっかり伝えていくことが大事で、苦手だなと思わないような教育の在り方、知識だけでなく体験を通した学びが重要である。
- 女性でも社会で活躍できるということを高校の時期からしっかり

伝えていくことも非常に大事で、女性だから理系が苦手などというバイアスをなくしていく教育も大事である。また、地域の偉人について学んだり、地域で活躍している、また出身地域の外で活躍されている方との触れ合いをつくることで、子どもたちが自発的に地域に対する誇りや愛着を持つことになり、地方創生にもつながっていく。

- 学校づくりや教育内容は、主として各学校と学校設置者によって、それぞれの地域や生徒の実態、学習指導要領を踏まえて検討されるべきものであり、この協議会の主要な議題は、高等学校教育の基盤整備ではないかと考えている。
- 都市部以外の県立高校の小規模化が進んでいるが、十分な数の教職員が配置できない、施設設備の整備が遅れている、公共交通機関が不便で通学が困難、こういった不十分な教育条件に問題があるのではないかな。
- 地域の少子化が進み、単に高校教育を保障できるかという問題にとどまらず、地域社会そのものの持続可能性が問われている。適正規模に合わせて学校を再編整備するのではなく、小規模校にこそ十分な数の教職員を配置するとともに、エアコンやトイレの整備を進めるなど、積極的に格差是正措置を図るべきではないか。公立私立を問わず各校の教育条件に差が生じることのないよう協議を進めるべきであり、少なくとも、各高校に生徒獲得競争を強いて優勝劣敗の考え方で県立高校の再編整備を進めることのないようにしないといけない。
- 高校生が、自己肯定感、自己有用感を感じながらそれぞれの地域で活躍できる活動をしていくのは、キャリア教育の一環として大きなことである。
- 連携の面では、高校生と小学生、中学生と大学生など飛び越えた部分での連携に意義がある。公民館で高校生が小学生に勉強を教える取組は、双方にとって有意義な経験となっている。
- 探究的な学習を行うのはよいことだが、その目的や意義をきちんと理解して一生懸命取り組んでいる生徒がいる一方で、何で来たのかなと思われるような生徒もいると聞く。その意味で、先生方のサポートが非常に大事である。

イ 今後の協議の進め方について

第2回会議では「入学者選抜の在り方」の協議を行うこととし、専門委員会に調査研究を依頼する。なお、専門委員会の委員長については、規程に基づき会長から改めて指名する。また、今後のスケジュールについては、第2回会議にてお示しする。

ウ その他

特になし。

7 その他

- ・ 第 2 回協議会 日時：10 月 21 日（火）13：30～16：30
場所：県庁 3 階大会議室
- ・ 第 3 回協議会 日時：12 月 22 日（月）13：30～16：30
場所：未定